

査読論文

韓国語のコミュニケーション能力向上のためのドラマ的手法の活用 Using Drama Methods to Improve Communication Skills in Korean

単元ごとの実施と充実したフィードバックを通して
Through unit-by-unit implementation and enhanced feedback

金 世朗¹
KIM Serang

In this paper, we present a lesson that utilizes drama methods to improve communication skills in Korean. We summarize and discuss its pedagogical benefits and learners' thoughts about this approach. Based on the issues raised by Kim (2018), four feedback sessions by the teacher and self-assessment by the learners themselves were conducted. Presentations of skits were given in the next class to allow for sufficient practice, and by introducing unlearned expressions before the presentation and including confirmation questions after the presentation, we tried to ensure active participation by the presenter and those listening to the presentation. The retention of grammar items in the learner scripts and the final written test confirmed that the drama methods helped the learners to retain what they had learned and improved their communicative ability in Korean. The learner questionnaires showed a high level of satisfaction with the utilization and feedback methods, and above all, the learners themselves seemed to realize the educational benefits of the activities. However, issues that need to be addressed are to make the activities easier, such as by creating more rapport between learners, and to reduce learners' anxiety about the activities.

キーワード： ドラマ的手法、コミュニケーション能力、フィードバック、スキットの発表
Key words: Drama Methods, Communication Skills, Feedback, Presentations of skits

1 はじめに²

日本の大学で韓国語を学習する学習者は、授業の時間を除けば韓国語を使う機会があまりなく、授業時間には教科書に従って語彙や文法の学習と練習を行い、授業後の自律的な学習に結びつかないことが多い³。その場合、学習内容を自らの言葉で表現し、実際の場面で適切に使うことは難しいと考えられる。筆者は教科書の一つの単元が終了すると、まとめの活動としてドラマ的手法 (Drama Method) を用いている。

佐野 (2004 : 209) では、ドラマ的手法について以下のように述べている⁴。

ドラマの最大の特徴は、疑似体験の機会を提供することである。「~のふりをする」と言ってもよい。架空の状況のなかで、架空の人物になったり、あるいは、架空の行動をすることによって、そこに含まれている言語項目や機能を習得させようとする活動である。

外国語教育でよく用いられるロールプレイやスキット、演劇公演などはすべてドラマの手法を活用した教授法である。筆者がドラマ的手法を用いる目的は、その疑似体験を通して、学習した内容を学習者自身が実際の場面と結び付けて適切に使用できるようにすることと、話す機会を与えることにある。

金世朗（2018）では、ドラマ的手法が韓国語の入門レベルから適用できること、及び教育的な効果が十分に期待できることを確認している。しかし、この研究からはいくつかの課題も明らかになった。筆者は、それ以来その課題を解決すべくドラマ的手法による授業法の修正を試みている。本稿では、授業の中で試行錯誤しながら行っているドラマの手法の活用法の紹介と教育的効果、学習者の満足度及び考えについて考察したいと思う。

2 先行研究

ドラマの手法の最も大きなメリットは、学習した語彙や表現をそれに合った適切な状況の中で使いこなし、長く定着させることができるということであろう。ドラマ的手法は、コミュニケーション能力の向上に役立つという研究が多く（노태권2005、이묘영2010、김재정2011、安藤2014など）、そのためによく活用する学習活動であるとも言われている（이완기1994：34）。その他、話す技能に役立つという研究（김지수2011、상명식2011、김재정2011）や「読む・聞く・書く・話す」の4技能の向上に効果的であるという研究（박희정2015、姜英淑2016）、語彙や文法学習に役立つという研究（鄭聖美他2015：151）もある。これらの研究は、ドラマの手法による教授法が、学習者の自発的な学習を促し、協調性や社会性及び総合表現能力を高め、達成感などの情意的な面においてもよい影響を与えると指摘している。

このように外国語学習に効果的なドラマ的手法であるが、上記の研究は、ある程度目標言語の知識が備わっている中級レベル以上のクラスにおける活用が多く、演劇または役割劇が授業の目的になっている授業、または観光韓国語（김혜원2016）、貿易韓国語（엄나영2014）のように特化された授業での活用であることが注目される。このことは、ドラマ的手法は基本的に入門レベルからの活用が難しいという考えがあるとともに、体系的に語彙や文法学習を進める普通の授業では活用しにくいことを示唆する。さらに、ドラマ的手法を活用する方法において、昔話や文学作品の劇化が多いことも目立つ（김지수2011、김재정2011、姜英淑2016）。これらの授業はいずれも中級レベルの授業であるが、姜英淑（2016）の学習者アンケートから「古い表現は覚えることが難しい」といった否定的なコメントがある通り、まだ学習段階である学習者にとって適切な題材か疑問を感じる。また、이경수（2015）は役割劇の活用法の問題点として、活動を期末テストの評価手段としてのみ使用すること、不十分なフィードバック、活動内容が学習内容と結びついていないことを挙げている。これらは、筆者が普段ドラマ的手法を活用している他の授業で感じる問題と共通する。

ドラマの手法が外国語学習に効果の高い教授法なら、より早くから普通の授業の中に取り入れて段階的に活用すべきであると考えられる。金世朗（2018）では入門レベルから授業の中にドラマ的手法を取り入れている活動例を紹介した。いくつかの課題は残ったものの、この研究からはドラマ的手法を基礎的な目標言語の知識がなくても活用できることが確認できた。一方で、ドラマ的手法による活動は、学習者の不安を高め、やる気を失う可能性があることも報告されている（SHANG XIANGZI 2016）。米山（2011：306）は、学習者の中には大勢の仲間の前で演じることに違和感を持つ者もいるため注意が必要で、ペアで練習を行い自信をつけてから演じるようにと指摘している。これはドラマの手法による活動を行う際、学習者の情意的な面も考慮し、活動法を十分に工夫

すべきであることを示している。よって、本稿では、金世朗 (2018) 以降のドラマ的手法の活用法を紹介するとともに、学習者の自信及び不安などの情意面における考察も行うことにする。なお、本稿におけるコミュニケーション能力とは、会話の当事者の関係や場面の違いなどを考慮に入れて、さまざまな状況で言葉を実際に使う能力とする (米山2011: 56)。

3 金世朗 (2018) におけるドラマ的手法の活用法と修正点

3-1 金世朗 (2018) におけるドラマ的手法の活用について

ここでは、金世朗 (2018) におけるドラマ的手法の活用法を紹介する。金世朗 (2018) では、韓国語の入門クラスから普段の授業の中にドラマ的手法を取り入れた活動例と、その教育的意義及び学習者の考えを紹介している。対象科目は、2016年度の韓国語非専攻者対象の選択科目「基礎韓国語Ⅰ」(前期: 24名) と「基礎韓国語Ⅱ」(後期: 16名) である⁵。教科書は『韓国語の時間ですよ』(以下『韓時間』) を使用しているが、この教科書はハングル文字の学習段階 (2 課) から本文を提示していることが特徴である⁶。

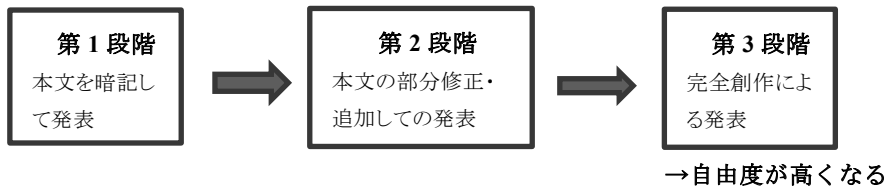


図1. ドラマ的手法の3つの適用段階

ドラマ的手法を活用した活動は、その単元の学習が終了した時点で行う。活動には教科書の本文を活用するのが基本である。ドラマ的手法は、学習段階により図1の通り3段階に分けて進める。ハングル学習時の第1段階では、本文を暗記して発表する。ある程度の語彙力と文法力がついたら第2段階に入り、本文の内容を部分修正または追加して発表する。用言の活用に慣れ、状況によってスキットを創作できると判断されたら第3段階に入り、本文と全く異なる内容のスキットを作成して発表する。単元が進むにつれ自由度が高くなるのである。第1段階は『韓時間』の本文が始まる2課からで、学習者の様子を見ながら5分から10分の間に本文を暗記して自然な感じで演じながら発表する。本文の部分修正または追加して発表を行う第2段階は、『韓時間』の9課の「해유체」の学習後から導入する。また、スキットを完全創作して発表する第3段階は、13課の「-았/었 (過去形)」の学習後から導入する⁷。第2段階と第3段階はそれぞれ20分から25分の準備の後に発表する。第3段階の活用例を詳細に紹介すると、単元の学習が終了したら、教師はスキットに入れる目標文法表現と勧誘、希望などの簡単な場面を提示する。学習者はその指示に従い、スキットを作成する。学習者は話す内容が決まれば、練習して発表する。発表は、基本的に発表の準備の直後にするが、発表する十分な時間がない時は次の時間にする。発表が終了すると、学習者は発表した次の時間までに、スキットの内容を思い出しながら再度清書して提出する。教師はそれを添削して返却するが、課題から見られた誤用は、全体と共有して指導する。金世朗 (2018) でスキットを作成した直後に発表を行ったのは、学習者が準備したセリフを覚えるのではなく、学習したことを状況に合わせて臨機応変に駆使してほしいという狙いがあったためである。

3-2 残された課題及び修正点

金世朗（2018）では、前期と後期を通してドラマ的手法による活動を行った「基礎韓国語Ⅱ」の履修者16名を対象にアンケート調査を行った。ドラマ的手法による活動は、韓国語学習に役立っているか、スキット準備の進め方は適切か、発表やフィードバックのタイミングはいつがよいかについて尋ねた。調査した結果、ドラマ的手法による活動について概ね肯定的に考えていたが、いくつかの課題が残された。

ドラマ的手法による活動において学習者へのフィードバックは、発表までは特に行わず、発表後にスキットの内容を清書した課題の添削を行い、課題を返却する時に全体フィードバックを行うという2回であった。しかし、学習者アンケートでは従来通りの課題返却時がよいと回答した学習者（16名中9名）と、発表の直後が良いと回答した学習者（16名中7名）で意見が分かれていた。確かに提出した課題へのフィードバックなので、発音の指導ができないことも問題であり、何よりも発表する際に内容や韓国語への不安のある学習者がいることが察せられる結果であった。また、発表を聞く立場からも不自然な韓国語による発表を聞くことは、教育的な面でもよくないことは言うまでもない。

さらに、学習者からは他の学習者の発表を聞くことに関して、自分が知らない未習語彙や表現を使われると内容がわからないので学習にならないという意見があった。相手が話す内容を知らないで発表を聞くことは韓国語学習にはつながらず、学習意欲を削ぐおそれがあると考えられた。

発表のタイミングに関しても意見が分かれており、発表準備をした直後に発表する方がよいと回答した学習者（16名中7名）よりも、次の時間に発表したいと回答した学習者（16名中9名）が多かった。発表のタイミングについても考慮すべきことがわかった。

金世朗（2018）の課題を踏まえ、それ以降の活動は、十分に練習する時間を取るためにスキットを準備した次の授業で発表を行うことにした。また、教師によるフィードバックを発表前と発表直後にも行うことにした。さらに、スキットの中に未習語彙などがある場合は、発表者が発表前に紹介することで、発表を聞く学習者が内容を理解しやすいようにした。それから、他の学習者の発表に集中するように発表を聞く学習者には、スキットの内容について確認の質問をするようにした。さらに、2021年度からは、学習者自身へのフィードバック（自己評価）も行うことにした。

4 ドラマ的手法を活用した授業実践

4-1 授業の概要

本稿で紹介する授業は、韓国語学習1年目の韓国語専攻者を対象とする2019年度から2021年度の「韓国語ⅠA（総合基礎）」（前期）と「韓国語ⅡA（総合初級）」（後期）である（以下「韓国語ⅠA」、「韓国語ⅡA」）。この授業は週2回あり、韓国語の「読む・聞く・書く・話す」の4技能を総合的に培うことを目的としている。「韓国語ⅠA」と「韓国語ⅡA」は連結しているが、選択科目なので履修者数は前期と後期で異なる⁸。

〈表1〉対象科目の履修者数と使用教科書

対象クラス (週2コマ×15回)	使用教科書 (一つの課は約2コマ～2.5コマで終了)
2019年度前期「韓国語ⅠA」－27名	『新装版できる韓国語初級Ⅰ』
2019年度後期「韓国語ⅡA」－26名	『新装版できる韓国語初級Ⅰ』＋自作教材、他資料
2020年度前期「韓国語ⅠA」－21名	『新装版できる韓国語初級Ⅰ』
2020年度後期「韓国語ⅡA」－18名	『新装版できる韓国語初級Ⅰ』＋自作教材、他資料
2021年度前期「韓国語ⅠA」－25名	『最新チャレンジ!韓国語』
2021年度後期「韓国語ⅡA」－18名	『ちょこっとチャレンジ!韓国語(改訂版)』

2019年度と2020年度は『新装版できる韓国語初級Ⅰ』(総20課)を使用した。教科書が学期の途中で終わるため、2021年度から前期は『最新チャレンジ!韓国語』(総13課)を、後期は『ちょこっとチャレンジ!韓国語』(総12課)を使用している(以下『チャレンジ!』、『ちょこチャレ』)。いずれの教科書も1つの単元を2コマ～2.5コマで終了しており、毎単元終了後にドラマ的手法を用いたスキットの発表を行っている。学習者は「韓国語ⅠA」と「韓国語ⅡA」を合わせて計20回以上のスキット発表を行うことになる。新型コロナウイルスの影響で、2020年度と2021年度の「韓国語ⅠA」(前期)はオンライン授業(Zoomを利用したリアルタイム配信型)を行ったが、ドラマ的手法による活動は方法を工夫し休まずに行った⁹。本稿では対面授業の場合を前提に活動法を紹介する。ここから、スキットを完全創作する第3段階の例を紹介する。

4-2 授業におけるドラマ的手法の活用法

教科書の一つの単元は、語彙の学習、文法紹介と練習、本文の学習の順に行う。単元の学習が終了したら、ドラマ的手法による活動を始める。活動を共にする相手は、くじで決めることもあれば、隣の学習者になることもあり2名または3名で行う。この時、教師は多様な学習者と活動するように工夫する。ドラマ的手法による活動は3-1で紹介した通り、学習が進むにつれ3段階にわたって進める。2021年度に使用した『チャレンジ!』で例を挙げると、本文が始まる5課から第1段階に入り本文を暗記して発表する¹⁰。「뭐예요?」や「어디예요?」を学習する7課から第2段階に入り本文の部分修正・追加しての発表を行う。「-아/어요」の学習が終わって動詞や形容詞などの語彙力も増えたと判断される9課から、本文を完全創作する第3段階に入る。いずれの段階も発表は次の授業時間に行うことにしている。活動の手順は図2のとおりである。

(1) 発表前の準備活動

スキットは、単元で学習した目標文法を入れることと、本文の最初のセリフで始まる対話文か文法表現と関連のある「相手を誘う」、「週末にしたことについて話す」、「日本と韓国の文化について話す」などの場面を提示して対話文を作成するように学習者に指示する¹¹。学習したことを応用し自由に考えてもらうために、ロールカードのような細かい条件は提示しない。実際話す場面を想定し、まとまりのある内容の対話文を作成するように促す。どうしても必要な場合は辞書などを調べても良いが、なるべく知っている韓国語を工夫してスキットを作るように指導する。スキットの作成時間は20分にし、次の時間まで練習してくるよう伝える¹²。発表は次の時間に行うが、発表前に教師は1回目のフィードバックを行う。学習者全員のスキットの内容と韓国語、そして発音の指導を行う。また、韓国語だけでなく実際に話す感じで自然に演技するように助言する。この時は、

学習者が話すのを聞いてのフィードバックになる。教師は学習者の間違いを指摘するだけでなく、良い点を見つけ、ほめるように努める。学習者全員の指導に所要する時間は、約10分～15分である。指導を受けた学習者は、教師が他の学習者を指導している間、練習を行う。

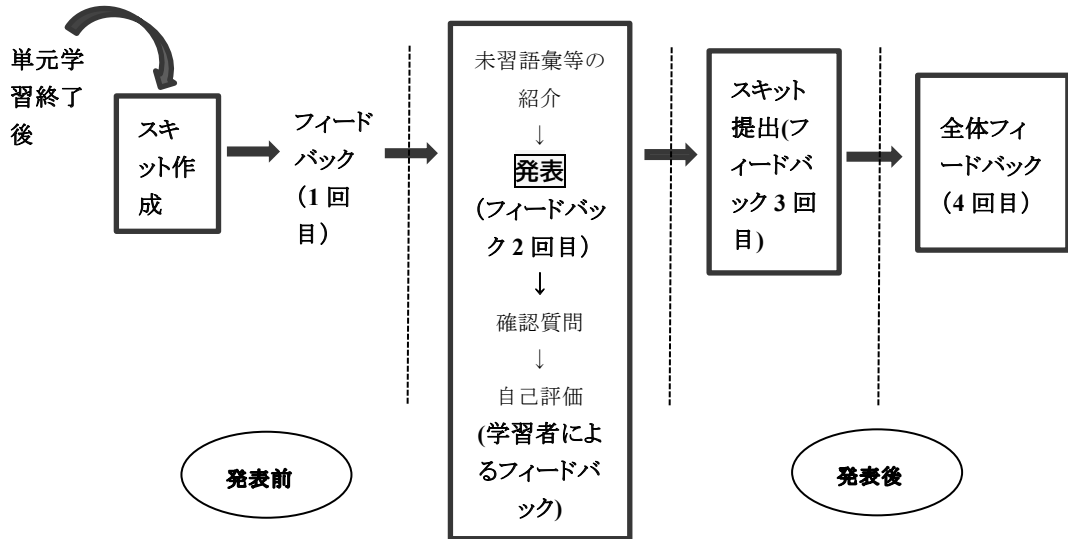


図2. 毎単元におけるドラマ的手法の活用手順

(2) 発表活動

発表者は、作成したスキットの中に未習語彙や表現がある場合は、発表を聞く他の学習者の理解を助けるために、それを発表前に紹介する(図3)。そして、発表は必ず全員の前で行う。学習したものがどのように使用されているかを共有することは、語彙や文法の学習はもちろん、「聞く能力」や「話す能力」、また「コミュニケーション能力」などを総合的に育成できるためである。さらに、教師からの一方的な知識の伝達ではなく、学習者自らによる相互的な活動になるのでより価値があると言える。発表者の発表が終了すると、教師は発表を聞いていた他の学習者に、スキットの内容について韓国語で簡単な質問をする。質問された学習者が、もし内容を聞き逃して答えられない場合は、発表者に直接韓国語で尋ねて確認するようにしている。また、教師は発表を終えた発表者に対して、「内容が面白い」、「発音がよくなっている」、「演技がよい」、「声が大きくて聞きとりやすい」などの肯定的なフィードバック(2回目のフィードバック)をする。最後に、発表者は各自が自分の発表に対して、①大きい声で実際に話す感じで発表できたか、②演じながら自然な感じで発表できたか、③言い淀みがなく流暢に話せたかの3点について自己評価(図4:できた項目に○付けする)し、ドラマ的手法による活動を終了する。学習者全員の発表に所要する時間は、約20分程度である。

(3) 発表後の活動

発表後は、発表した内容を清書して提出するように、次の授業までの課題にする。この課題により、学習者は学習した内容を再確認できるし、教師も学習内容の定着度が確認できる。また、各学

習者に合ったフィードバックもできる。この時は、学習者の文字による確認になる。提出された課題は添削し(3回目のフィードバック:図5)、誤用が多かったものや重要なポイントは課題の返却時にクラス全体で共有する(4回目のフィードバック)。一つの単元は、この全体フィードバックが終わった時点で終了となる。

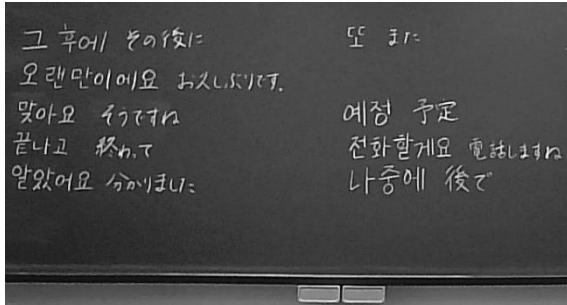


図3. 発表者による未習語彙や表現の紹介例

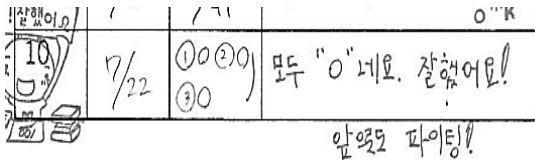


図4. 学習者の自己評価表

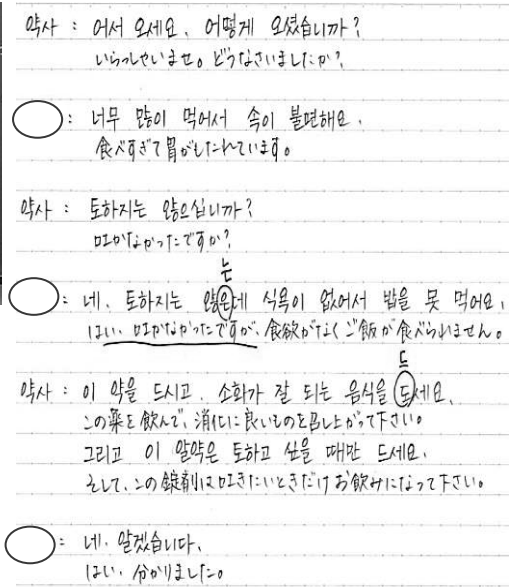


図5. 学習者の清書課題の例(『ちょこチャレ』9課)

(4) 発表活動と4技能及びコミュニケーション能力との関連性

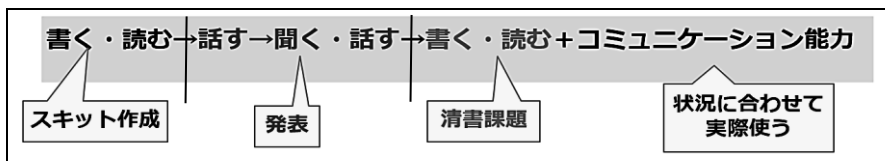


図6. 発表活動と4技能との関連

(1) から (3) までのドラマ的手法を活用した一連の活動は、学習した内容を実際のコミュニケーションの場でどのように使用できるかを考えるきっかけを提供することになる。また、スキットを作成することで「書く」と「読む」活動の練習になり、発表を行うことで「話す」と「聞く」活動の練習ができる。特に、クラス全員の発表を共有するので、学習者は目標文法が使用される様々な状況に繰り返し接することになる。例えば、10グループが発表すると仮定すれば、学習者は学習した目標文法表現が使用される10のコミュニケーション場面を経験することになる。また、この発表活動は、発表者だけでなく教師による確認の質問があるため、発表を聞く学習者も「聞いて話す」練習ができる。さらに、発表が終了した後は、スキットの清書課題があるため、再度「書く」

と「読む」練習をすることになる。すなわち、図6のように「書く・読む・話す・聞く」の4技能を繰り返し鍛えることになり、学習した内容を状況に合わせて適切に使用するコミュニケーション能力も培うことになるのである。

(5) 評価について

毎単元のまとめとして行うドラマ的手法による活動は、成績評価の対象にはしない。教師による4回のフィードバックと学習者による自己フィードバックがあるためでもあり、この活動の教育的価値を考慮すると、評価の手段ではなく普段の教室活動として行うべきだと考えるためである。

4-3 ドラマ的手法の教育的効果

ここでは、学習者が作成したスクリプトと期末筆記テストの文法項目の定着度から、ドラマ的手法による活動の教育的効果を確認したい。

(1) 学習者スクリプトの紹介

〈『新装版できる韓国語初級Ⅰ』18課「식사라도 같이 할까요?」〉

教科書の本文の例	学習者スクリプトの例
문경옥:오늘 저녁에 약속 있어요?	A:이번 주말에 약속이 있어요?
요코 :아뇨, 왜요?	B:아뇨, 왜요?
문경옥:그럼, 식사라도 같이 할까요?	A:C 씨는 어때요?
요코 :좋아요. 어디에서 만날까요?	C:저도 괜찮아요.
문경옥:명동역 앞에서 만날까요?	A:그럼 우리 다 같이 <u>놀러 갈까요?</u>
요코 :네, 몇 시가 좋으세요?	B:좋아요. 점심은 조[초]밥을 <u>먹읍시다.</u>
문경옥:7시 반은 어때요?	A:어디로 <u>놀러</u> 가요?
요코 :괜찮아요.	C:뭘 해요?
문경옥:그럼, 이따가 봅시다.	B: <u>쇼핑하는</u> 것은 어때요?
	C:저는 노래방[방]도 가고 싶어요.
	A:그러면 밥을 먹고 <u>쇼핑을 한 후에</u> 노래방에 <u>갈시다.</u>
	B:몇 시에 <u>만날까요?</u>
	C:일요일 오후 한 시에 니가타 역에서 만나요.
	A:네!! 기대 되네요.
	* [] は学習者の誤用を添削したものである。

上のスクリプトは、韓国語学習を始めた21週目（週2コマなので42回目）の授業で行った2020年度「韓国語ⅡA」の学習者のものである。教科書『新装版できる韓国語初級Ⅰ』18課の目標文法である「- (으) ㄴ 까요?」、「- (으) ㅂ시다」、「- (으) 러」を使って作成した相手を誘う内容の対話文である。スキット作成において筆者からは、本文の最初のセリフ「○○에 약속 (ㅇ) 있어요?」で始まる対話文を作成するように指示されていた。左の教科書の本文と右の学習者スクリプトは、最初のセリフ以外は別のものになっている。両方とも相手を誘う場面の対話文であるが、教科書の本文は相手を誘って待ち合わせの場所と時間を決める簡単な内容である。一方で、学習者スクリプトは、誘い方をはじめ、遊ぶ内容や食事のメニューを決める話が加わり、会話の終わり方も

実際に会う約束をするというように、自然なものになっている。なお、目標文法である「- (으) ㄴ 까요?」、「- (으) ㄴ 시다」、「- (으) ㄴ 러」も場面に合わせて正確かつ適切に使用されている。このスキットの発表者から、発表前に紹介された未習表現は、「쇼핑하는 것」と「쇼핑을 한 후에」である。学習者はこの活動を通して、目標文法が話の中でどのように使われるべきかを考えながらスキットを作っているのであり、これは単に文法学習に留まらず、コミュニケーション能力にまで拡張していることを意味する。発表を聞く学習者は、他の学習者の発表から多様な状況での使用を体験することになり、未習語彙や表現の紹介でその場面に必要な新しい韓国語も学習することになる。この発表後に筆者は、発表を聞いていた学習者に、「세 사람은 무엇을 같이 합니까?」、「몇 시에 어디에서 만납니까?」といった確認質問をしている。

(2) 期末テストから見る文法項目の定着度

4-2の(4)で、現在授業で行っているドラマの手法の活動を通して、韓国語の4技能とコミュニケーション能力を繰り返し育成できることを述べた。ここでは、学習者が学習した文法表現をどれほど理解し、正確に使えるかその定着度を紹介する。〈表2〉は、2021年度「韓国語ⅡA」(履修者数18名)の期末筆記テスト¹⁴の文法問題の正解状況である。〈表2〉の1番から10番の問題は、学習者のスキットの中で誤用が見られたものを対象としており、中には教科書で正式に学習していないものも含む。例えば、「선생님 말씀을 잘 들으세요.」を提示し、「들으세요.→들으세요」のように不自然なところに下線を引いた後に正しく直す問題である。理由を表す「-아/어서」と「- (으)니까」の使い分けなど、学習者がよく誤る問題を扱っている。11番から29番の問題は、教科書で学習したものを「後で大学院に行こうと思います」のように日本語で提示し、韓国語で作文する問題である。〈表2〉では該当する文法項目に対し、正解した学習者数を記している。なお、「아사코 씨한테 잘 오 (어) 올릴 것 같아요」のように、表記に誤りがあっても当該文法項目「- (으) ㄴ 것 같다」において活用や使い方が正しければ正解としてカウントしている。

〈表2〉2021年度「韓国語ⅡA」期末筆記テストの文法問題の定着度

	文法項目	正解者数		文法項目	正解者数
1	ヒ変+- (으)세요 (～てください)	17/18	16	-아/어서 (～動作の順序)	18/18
2	形容詞現在連体形	17/18	17	-는데 (～なんだけれど)	17/18
3	助詞을/를 모르다 (～が分からない)	15/18	18	-만 (～だけ)	18/18
4	-아/어서 (～て理由)	18/18	19	-아 주시겠어요? (～てくださいますか)	18/18
5	오変過去形	17/18	20	-한테 (～(人)に)	17/18
6	- (으)니까 (～だから理由)	15/18	21	- (으)ㄴ 것 같다 (～しそうだ)	16/18
7	아직 안 했어요 (まだ～ていない)	10/18	22	- (으)ㄴ 때 (～するとき)	18/18
8	助詞유학을 가다 (留学に行く)	18/18	23	- (으)세요? (お～ですか)	18/18
9	ㄴ語幹+- (으)시 (尊敬)	13/18	24	- (으)면서 (～しながら)	18/18
10	存在詞現在連体形	18/18	25	動詞現在連体形	18/18
11	- (으)려고 하다 (～しようとする)	18/18	26	- (으)로 (～へ)	16/18
12	-지 마세요 (～しないでください)	17/18	27	-던過去回想連体形	18/18
13	形容詞の現在連体形	18/18	28	-아/어지다 (～くなる)	17/18
14	助詞을/를 좋아하다 (～が好きだ)	18/18	29	-아/어야 하다 (～しなければならない)	17/18
15	動詞間接語法平叙文	18/18			

〈表2〉を見ると、正解している割合が全体的に高いことがわかる。特に習得が難しい連体形(2番、10番、13番、22番、25番、27番)の正解率が高いことが注目される。半面、29問の中で誤答者が多かったのは、7番の「식사하셨어요?-아직 식사 안 해요 (→안 했어요)」と9番の「아주 힘

듣시켰네요 (→힘드시켰네요)」である。これらは、教科書で学習したものではなく、ドラマ的手法による活動の際に学習者のスキットの中で使用されたものである。誤答者が多いことから、教科書以外のもので扱った内容は、より充実した練習が必要なのことがわかった。

以上、学習者スクリプトと期末筆記テストの文法項目の定着度を確認した。学習したものを場面に合わせて確実に使用できていることと、学習した文法項目を全体的によく使用できていることから、ドラマ的手法による教授法の教育的効果は認められるのではなかろうか。

5 ドラマ的手法を活用した授業法に対する学習者の考え：アンケート結果

ここでは、ドラマ的手法を活用した授業法に関する学習者の考えを紹介する。学習者へのアンケートは、「韓国語ⅡA」（後期）の授業の最終回に行っており、欠席した学習者以外は全員回答している。回答者は、2019年度は履修者26名中23名、2020年度は17名全員、2021年度は18名中17名で合計57名である。設問は全部で14問である。設問の内容は、授業で活用しているドラマ的手法が韓国語能力の向上に役立っているかを尋ねる質問（質問1～質問3）と、活動法（質問4～質問7）及びフィードバック法について尋ねる質問（質問8～質問10）、また学習者の情意面への影響について尋ねる質問（質問11～質問14）で構成している。活動法に関する質問4、質問5、質問6を除いては、「そうである」、「どちらともいえない」、「そうではない」の3段階の評価法¹⁵を取り入れている。なお、これらの設問は、学習者の考えを具体的に知るために選択した理由を記述するようにしている。

5-1 ドラマ的手法による活動と韓国語能力の向上について

〈表3〉韓国語能力の向上との関連性（23名（2019年）+17名（2020年）+17名（2021年）=計57名）

そうである	どちらともいえない	そうではない
質問1. 自分で考えてスキットのセリフを作ることは韓国語学習に役立つか		
23+17+17=57/57	0+0+0=0/57	0+0+0=0/57
質問2. 発表の前に未習語彙や表現を紹介することはスキットの理解や韓国語学習に役立つか		
22+16+17=55/57	0+1+0=1/57	0+0+0=0/57
		*1名未記入
質問3. 他の人の発表を聞くことは韓国語学習に役立つか		
22+16+17=55/57	1+1+0=2/57	0+0+0=0/57

〈表3〉で見る通り、多くの学習者がドラマ的手法による活動について肯定的に考えていることがわかる。質問1の自分で考えてスキットを作成することに関して、履修者57名全員が韓国語学習に役立っていると回答した。学習者はその理由として、「学習したことをそのままにせず、実際にどのような場面で使うか考えたりすることでより身につく」、「リーディング・ライティング・リスニングなどですべての役に立つ方法だと思う」、「教科書と別の文法の使い方を友達と考えることができる」などを挙げた。これらの回答は、授業で行っている活動が韓国語の4技能とコミュニケーション能力の向上に役立っていることを学習者自身が実感していることを表す。

質問2では、発表者が発表の前に未習語彙や表現を紹介することが、スキットの理解や韓国語学

習に役立つかを尋ねた。その結果、57名中55名が「そうである」と回答した。一方、「どちらともいえない」と回答した1名は、「自分の発表に精一杯であんまり確認できない」と記述していた。学習者の発表前の緊張感を表す回答である。質問3は、他の学習者の発表を聞くことは韓国語学習に役立つかを尋ねるものである。57名中55名は「そうである」と回答しており、その理由として「聞き取りの練習になる」、「多様な場面での使い方を知ることができる」、「他者から新たなアイデアや語彙などを学ぶことができる」などを挙げている。一方、「どちらともいえない」の2名は、「他の人の発表がスムーズすぎて聞き取れない」、「自分の発表を覚えるのに必死な時がある」と回答している。前者に関しては、発表者にゆっくりと大きな声で発表するようにさらに指導する必要性を感じた。後者は、質問2の「どちらともいえない」の回答者と同様に、発表前の不安な気持ちが表れていると言えよう。

以上、ドラマ的手法による活動が韓国語能力の向上に役立っているかについて、学習者のほとんどが肯定的に思っていることがわかった。ただ、発表前の不安や緊張感により、他の学習者の発表を集中して聞くことに関してやや否定的な学習者がいることも確認できた。

5-2 ドラマ的手法における活動法とフィードバックについて

〈表4〉活動法に関して (23名 (2019年) + 17名 (2020年) + 17名 (2021年) =計57名)

質問4. 一緒にスキットを準備する相手はどんな人がいいか	毎回かえる方がよい	毎回同じ人がよい	その他
	8+15+15=38/57	14+0+1=15/57	1+2+1=4/57
質問5. スキットの作成において場面や状況はより細かく指示したほうがよいか	はい	いいえ	どちらともいえない
	1+1+0=2/57	22+16+17=55/57	0+0+0=0/57
質問6. 発表タイミングはいつがよいか	発表の準備の直後	次の時間に	その他
	6+3+0=9/57	16+11+17=44/57	1+3+0=4/57
質問7. 発表後の確認質問は、他チームの発表を注意深く聞くきっかけになるか	そうである	どちらともいえない	そうではない
	23+17+15=55/57	0+0+1=1/57	0+0+0=0/57 *1名未記入

〈表4〉は、ドラマ的手法における活動法に関する回答結果である。質問4の一緒にスキットを準備する相手はどんな人がよいかについて、「毎回かえる方がよい」が57名中38名で最も多かった。次に「毎回同じ人がよい」が14名で、「その他」の「誰でもよい」が2名、「同じ人と数回、違う人と数回」、「同じ友達もいいけど、いろいろなクラスメートとペアになるのも新鮮で楽しい」と回答した学習者が1名ずついた。3分の2以上の学習者が多様な人との活動を望んでいる。しかし、注目されることは、「毎回同じ人がよい」と回答した15名中14名が、2019年度の学生であることだ。韓国語の授業は例年女子学生が多い。2019年度の「韓国語ⅡA」は履修者26名のうち男子が4名で、2020年度は履修者全員が女子であった。2021年度は履修者18名のうち男子が2名であった。クラスの雰囲気を見ると、2019年度は例年より履修者数が多く、学習者同士の距離があったことを覚えている。特に男子学生4名とも他の教室活動においても消極的な様子がうかがわれた¹⁶。ペアになる人によっては活動しづらいこともあったと考えられる。毎年履修者の人数や性比、性向は異なる。履修者同士の距離を縮め、活動しやすくする工夫が必要であることを痛感した。

質問5は、スキットの課題を与える時の指示法に関する質問である。学習者に課題を与える時は、その単元で学習した文法表現を必ず入れることと、対話文の最初のセリフを与えるか、または簡単な場면을提示してスキットを作成するように指示している。そのような方法ではなく、ロール

カードのように場面や登場人物の設定をより詳細に提示した方がよいかを尋ねた。「いいえ」が57名中55名で「いろいろな場面ができるため知れる単語や表現が増える」、「作る人によって色々な出来上がりになってとても良いと思う」など学習者は自由に多様なストーリーが作られることを良い点として挙げている。「はい」と回答したのは2名で「ストーリーの設定を決めるのに時間がかかってしまう」と回答している。

質問6では、発表のタイミングを尋ねる質問で、現状では次の授業時間に学習者の発表を行っている。「次の時間がよい」が57名中44名で最も多く、「発表準備の直後がよい」が9名であった。「その他」は「週末などを挟んで行ってほしい」が2名、「いつでもよい」が2名であった。「次の時間がよい」と回答した学習者は、「授業中に考えたものを家で見直すと間違いを見つけて直すことが多いので、その時間があつた方がいい」、「練習する時間や見直す時間が欲しい」などを挙げている。注目されることは、ただセリフを覚える時間が欲しいのではなく、作成したスキットを見直す時間がほしいということである。自分で書いたものを見直すことは、学習への強い動機付けにつながっており、重要な活動だと考えられる。一方、準備の直後がよいと回答した学習者は「準備と発表の時間が長いとセリフを忘れてしまう」ことを挙げている。ドラマ的手法を用いた最初の時期は、スキットの準備の直後に発表を行っていた。しかし、金世朗（2018）の調査結果、多くの学習者が次の時間の発表を望んでおり、方法を変えたのである。この活動が苦手な学習者のためにも、十分に練習時間を取った後の発表がいいと考えられる。質問7では、発表後に発表を聞いていた学習者にスキットの内容について確認の質問を行うことが、発表を注意深く聞きかけとなっているかを尋ねた。57名中55名の学習者が「そうである」と回答した。発表後に確認質問をする前は、他の学習者の発表は聞かず、自分の発表の練習をする学習者が多かった。質問をすることで、他の学習者の発表も注意深く聞くことになり、質問3で確認した通り、リスニングの練習にもつながっているのである。「どちらともいえない」を選択したのは1名で、「質問がなくても聞いているが、質問があると細かいところまで覚えておかないと！と少し焦ってしまう時もあるから」と回答している。他人の発表を聞く時は、大事なところはメモしながら聞くように促しているが、指導をさらに徹底する必要性を感じた。

〈表5〉フィードバック法に関して（23名（2019年）+17名（2020年）+17名（2021年）=計57名）

そうである	どちらともいえない	そうではない
質問 8. 発表前の発音や韓国語についてのフィードバックは韓国語学習に役立つか		
23+17+17=57/57	0+0+0=0/57	0+0+0=0/57
質問 9. 課題返却時によく間違える韓国語を紹介しているが韓国語学習に役立つか		
23+17+17=57/57	0+0+0=0/57	0+0+0=0/57
質問 10. 発表後の自己評価は、発表を頑張るきっかけになっているか（2021年17名対象）		
17=15/17	2=2/17	0=0/17

〈表5〉の質問8と質問9は、教師によるフィードバック法に関する質問である。質問8では、発表前に教師が行う発音のチェックや韓国語の確認が韓国語学習に役立つかを尋ねた。質問9では、学習者が提出した清書課題の返却時に、スキットから見られた誤用をよく間違える韓国語として紹介することが韓国語学習に役立つかを尋ねた。質問8と質問9とも、57名中57名の学習者全員が「そうである」と回答した。倉八（1996：47）では、学習者は教師が訂正すべきと感じる以上に誤

りの訂正とフィードバックを望んでいると述べている。学習者が望んでいることであり、学習者自身も韓国語学習に役立つと実感していることから、フィードバックはできる限り丁寧にすべきであることがわかる。

質問10では、発表後に学習者自身が自分の発表に対して自己評価 (①大きい声で実際話す感じで発表できたか、②演じながら自然な感じで発表できたか、③言い淀みがなく流暢に話せたかの3点) することが、発表を頑張るきっかけになるかを尋ねている。発表者自身への自己評価は、2021年度から新たに実施した活動である。その結果、2021年度の回答者17名中15名が「そうである」を、2名が「どちらともいえない」を選択した。「そうである」を選択した学習者は、「何に気を付けて発表すればいいかわかる」、「自分ができなかったことを確認して次に生かそうと思える」、「この評価が始まってから声が聞きやすくなった人が増えたと思うし、自分も相手に伝わるようにと前よりも思うようになった」と記述している。一方、「どちらともいえない」と回答した学習者は、「自己評価の記入の有無にかかわらず発表に熱心に取り組んでいるため!」と書いていた。自己評価をすることは、よい発表のための動機付けになっていると考えてよいであろう。

5-3 ドラマ的手法が学習者の情意面に与える影響

〈表6〉学習者の情意面に与える影響 (23名 (2019年) + 17名 (2020年) + 17名 (2021) =計57名)

そうである	どちらともいえない	そうではない
質問 11. ペア活動によって自分が知らなかったことを知るようになったり、自分が知っていることを相手に伝えることで勉強になったり喜びを感じたりしているか *2名無記入		
20+16+17=53/57	1+0+0=1/57	1+0+0=1/57
質問 12. 発表後にみんなに内容が伝わっていると感じる時に自信につながっているか		
23+16+17=56/57	0+1+0=1/57	0+0+0=0/57
質問 13. 発表前のフィードバックは緊張感をほぐし自信をもって発表することにつながっているか		
22+13+16=51/57	0+3+1=4/57	1+1+0=2/57
質問 14. スキットの発表は緊張や不安が大きく精神的に負担になっているか (2020/21年 34名対象)		
8+10=18/34	9+7=16/34	0+0=0/34

Zoltán (2012 : 44, 100-102) では、共通の目標に向けた学習者間の協同は動機付けを高めるうえで非常に強力な手段であると述べ、その活動にロールプレイなどを挙げている。スキットを作って発表をするという共同の課題遂行のために、学習者間の協同活動は盛んになる。相互に持っている知識とアイデアを出し合い課題を遂行していく過程で自分の知識を共有したり、他人から学習したりする貴重な経験をすることになる。〈表6〉の質問11では、協同活動を通して相互に学習になりやりがいを感じるかを尋ねた。その結果、「そうである」と回答した学習者が57名中53名で肯定的に回答していた。一方、「どちらともいえない」と回答した1名は「勉強にはなるが喜びは感じない」、「そうではない」と回答した1名は「自分のことについて話すのがあまり気が進まない」と記述している。このことから、相互学習が学習成果につながる一方で、協同活動が苦手な学習者がいることもわかる。質問12では、自分たちの発表が他の学習者に伝わっていると感じる時に自信につながっているかを尋ねている。「そうである」と回答したのが57名中56名で、ほとんどの学習者が肯定的に考えていた。この活動が学習者の自信につながっていることがわかる。その半面で、「どちらともいえない」と回答した1名は、「皆に内容が伝わっているかはわからない」と記述して

いた。この活動では発表後に発表を聞いていた学習者に、発表内容について確認の質問をしているが、その活動を通して他の学習者に伝わっているかどうかを確認できる。これは、自分の発表に対して自信が持てず不安に思っているということであろう。

質問13では、教師による発表前のフィードバックにより、緊張感をほぐし自信をもって発表できているかを尋ねた。筆者が発表前にフィードバックを設定することは、間違った韓国語での発表を防ぐという意図もあるが、発表者に作成したスキットと自分の韓国語について自信を持たせることも意図している。その質問に対し、57名中51名が「そうである」と回答した。回答者は「実際に使って添削してもらっているから自信を持って使えそう」と記述しており、フィードバックによって学習者は自信を得ていることがわかる。一方で、4名の学習者が「どちらともいえない」と回答しており、その理由として「自信にはつながるが緊張してしまう」、「発音の指導はとてもありがたいが、直前で文章を作り直すことになる」と時間がないと焦る」と書いている。発表前のフィードバックは自信につながるが緊張が無くなるわけではなく、また直前に文章を直されることへの不安な気持ちが表れている。倉八（1996：48）は、良かった点を具体的に述べるフィードバックは、高不安者に自信をつけ不安を補償するものであると述べている。今後、フィードバックの仕方についてさらに工夫することと、発表の直前にあまり大きい修正はしないように配慮する必要性を感じた。「そうではない」と回答した2名の学習者は「もともと緊張していないからわからない。みんな優しいからリラックスしてできる」、「結局緊張するから」と記述しており、対照的な様子が見られた。

質問14は、2020年度と2021年度の学習者を対象に、人前で発表をすることへの精神的な負担について尋ねた。いくら効果的な教授法であっても学習者が苦痛に思うものなら、改善する必要があるためである。その結果、34名中18名は「負担になっていない」を、16名は「少々負担になっているが大丈夫」を選択した。「大きな負担になっているのでやめてほしい」は0名であった。この結果から精神的に負担になっている学習者はいるが、活動そのものに関しては肯定的に評価していると考えられた。

6 おわりに

ドラマ的手法による活動は、外国語教育において教育的効果が高く、授業でよく活用される教授法である。半面、이경수（2015）はドラマ的手法の活用における問題点として、成績評価の手段としてのみ活用することと不十分なフィードバック、また学習内容との関係の薄さを挙げている。その指摘の通り、ドラマ的手法は活用次第でその効果が違ってくる。裏を返せば、工夫次第で様々な活用が可能な教授法だと言うことができる。

筆者は、入門レベルから学習内容と結び付けて毎単元の学習後に、ドラマ的手法による活動を行っている。本稿では、金世朗（2018）の課題を踏まえ、韓国語のコミュニケーション能力の向上を目指す活用例の紹介とその教育的効果及び学習者の考えをまとめて考察した。金世朗（2018）からの最も大きな変更点は、フィードバック法である。教師によるフィードバックを4回に増やし、学習者自身によるフィードバックも取り入れた。発表は十分な練習ができるように、次の授業で行い、発表前の未習表現の紹介と発表後の確認質問を入れることで、発表者だけでなく発表を聞く学習者も積極的に活動に参加するように工夫した。この活動により、学習者は「書く・読む・話す・聞く」の4技能を繰り返し鍛え、コミュニケーション能力を向上させることができると期待できた。

ドラマ的手法の教育的効果を確認するため、学習者スクリプトと期末筆記テストの文法項目の定着度を参考にした。その結果、ドラマ的手法が学習内容の定着を手助けし、韓国語のコミュニケー

ション能力の向上に繋がっていることが確認できた。学習者を対象としたアンケートでは、ドラマ的手法が韓国語能力の向上に役立っているか、活動法及びフィードバック法は適切で効果的か、学習者の情意面への影響はどのようなものかを尋ねた。その結果、ドラマ的手法による活動は韓国語学習に十分に役立っていることが確認できた。また、その活動が韓国語の4技能とコミュニケーション能力の向上に繋がっていることを、学習者自身が認識している様子うかがわれた。さらに、発表を次回の授業時間にしたことが、学習への強い動機付けになっていることも確認できた。発表前と発表後の教師によるフィードバックも十分に学習になっているし、発表後の自己評価はよい発表のための動機付けになっていた。発表前の未習表現の紹介は、発表内容の理解に役立ち、発表後の確認質問も他の学習者の発表をよく聞くきっかけになっていた。また、学習者の情意的な面に関する質問からは、ドラマ的手法による活動が、学習者間で相互学習になっており、自信の向上に役立っていることも確認できた。よって、金世朗 (2018) 以降に修正したドラマ的手法の活用法は有効な方法であると判断された。一方で、今回の調査を通して、いくつか新たな課題も確認できた。

学習者の期末筆記テストの文法項目の定着度は全体的に高かったが、学習者スキットで誤用があったもの、即ち学習者がよく間違える韓国語として扱った問題の定着度が特に低かった。それらは、より充実した練習が必要なのことがわかった。また、この活動は、学習者を緊張させ、不安を与えることも明らかになった。その緊張と不安は、他の学習者の発表を集中して聞くことと、自分の発表について自信を持つことに対する障害になっていた。元田 (2005) は、第二言語不安のうち、教室内の不安要素として、教室で口頭発表をすることやロールプレイをすることを挙げている。よって、筆者が行っている活動の最も大きな課題は、学習者の緊張や不安を軽減させ、自信を持って発表できるように工夫することだと考えられた。さらに、発表直前に行うフィードバックで、修正内容によっては学習者の不安を増大させる恐れがあることもわかった。今後、フィードバックの仕方を工夫する必要性も感じた。また、一緒に活動する相手について、多くの学習者が多様な人と組んで活動したいと回答する中で、2019年度の学習者は回答者23名中14名が毎回同じ人と活動したいと回答していた。これは、学習者同士で距離があったことが原因だと考えられた。そのことから、学習者間の距離を縮め、活動しやすくすることも課題として考えられた。協同学習が苦手な学習者もいるので、アイスブレイク¹⁷などを積極的に取り入れるなど、学習者間の人間関係を構築することが重要だと考えられる。

先述した通り、ドラマ的手法は工夫次第で様々な活用が可能な教授法である。本研究を通して改めて明らかになった問題点を改善し、学習者全員が安心して楽しく活動できるように、今後も効果的で有益な活用法を工夫していきたい。

謝 辞

本研究にあたり、2019年度、2020年度、2021年度の「韓国語ⅠA」と「韓国語ⅡA」を履修し、アンケート調査に応じていただいた学生達に心より感謝する。また、本稿の執筆に際し、匿名の査読者から大変貴重なご助言をいただいた。深く感謝申し上げたい。

参考文献

[日本語文献]

安藤栄子 (2014) 「英語劇を取り入れた授業の効果」『国際関係研究』35 (1), 日本大学, pp.41-49

韓国語のコミュニケーション能力向上のためのドラマの手法の活用
単元ごとの実施と充実したフィードバックを通して

- 姜英淑 (2016) 「演劇的なアプローチによる韓国語教育—松山大学応用クラスにおける試み—」 朝鮮語教育学会第71回例会発表資料
- 金世朗 (2018) 「韓国語入門・初級クラスにおけるドラマ的手法の実践に関する考察」『日本語文化研究』第五輯下, 延慶大学出版社, pp.78-88
- 倉八順子 (1996) 「スピーチ指導におけるフィードバックが情意面に及ぼす効果」『日本語教育』89, 日本語教育学会, pp.39-51
- 佐藤智子 (2019) 「アクティブ・ラーニング型授業におけるアイスブレイクの意義と方法」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』5巻, 東北大学高度教養教育・学生支援機構, pp.203-212
- 佐野正之 (1981) 『英語授業にドラマ的手法を』大修館書店
- 佐野正之 (2004) 「Drama Method (ドラマの指導法)」田崎清忠 (編集) 『現代英語教授法総覧』大修館書店, pp.209-214.
- 鄭聖美・ブッシュネルケード (2015) 「発話促進と学習意欲向上の側面からみた「スキット活動」の可能性と課題—初級クラスにおける実践の事例分析—」『日本語教育論集』第30号, 筑波大学留学生センター, pp.139-160
- 元田静 (2005) 『第二言語不安の理論と実態』溪水社
- 米山朝二 (2011) 『新編英語教育指導法事典』研究社

[韓国語文献]

- 김지수 (2011) 「역할극 수행이 한국어 중급 학습자의 말하기 능력에 미치는 영향」 이화여자대학교 국제대학원 석사논문
- 김재정 (2011) 「극화 학습을 통한 한국어 말하기 교수 학습 방안」 공주대학교대학원 석사논문
- 김혜원 (2016) 「역할극을 활용한 관광한국어 교육 방안 연구-중국인 초급 학습자를 대상으로-」 경희대학교 교육대학원 석사논문
- 노태권 (2005) 「교육연극을 통한 한국어 사용 능력 신장에 관한 연구」 부산외국어대학교 교육대학원 석사논문
- 박희정 (2015) 「한국어 능력 향상을 위한 교육 연극 기법」 『한국 콘텐츠학회 논문지』 15 (11), 한국콘텐츠학회, pp.672-679
- 상명식 (2011) 「교육연극적 기법을 활용한 말하기 능력 향상 방안」 상명대학교교육대학원 석사학위논문
- 엄나영 (2014) 「역할극을 활용한 무역 한국어 교수-학습 방안」 『연구한국언어문화학』 제11권제1호, 국제한국언어문화학회, pp.91-112
- 이경수 (2015) 「역할극을 활용한 효과적인 프랑스어 수업」 『프랑스어문교육』 49, 한국프랑스어문교육학회 pp.59-90
- 이묘영 (2010) 「한국어 표현능력 신장을 위한 교육 연극기법 활용 연구」 『국어교육연구』 25권, 서울대학교 국어교육연구, pp.335-363
- 이완기 (1994) 『초등영어교육론』 문진당
- SHANG XIANGZI (2016) 「역할극을 활용한 한국어 말하기 교수 학습 방안-중국인 학습자를 대상으로-」 이화여자대학교 대학원 석사논문

[英語文献]

Zoltán Dörnyei 2012. *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge : Cambridge University Press.

[教科書]

- 金順玉・阪堂千津子 (2014) 『最新チャレンジ!韓国語』白水社
- 金順玉・阪堂千津子・崔榮美 (2021) 『ちょこっとチャレンジ!韓国語 改訂版』白水社
- 新大久保語学院・李志暎 (2016) 『新装版できる韓国語初級 I』DEKIRU出版
- 山田佳子・金世朗 (2014) 『韓国語の時間ですよ』同学社

注

- 1 新潟県立大学国際地域学部
- 2 本稿は、第12回日本韓国語教育学会学術大会 (2021年11月7日オンライン開催) で発表した内容に、資料を追加し、さらに発展させたものである。
- 3 SNS (HELLOTALKのような言語交換学習アプリ等) を利用して韓国語使用を図る学習者もいるが、それほど多くなく、教室外で韓国語を使用する機会はなかなかないのが現実である。
- 4 佐野 (2004) は、Drama Methodによる活動を、①Dialogueを中心にした活動、②オープン・エンドのシナリオ

- (Open-Ended Scenario) や社会的ドラマ (Sociodrama) の活動、③上演をめざす活動、④演技のエクササイズを中心とした活動の4種類に分類した。①Dialogueを中心にした活動は、さらに「文法項目の練習」と「言語機能の練習」、「統合した練習」に分けている。ロールプレイやスキットの発表は、文法と機能を統合して練習できる「統合した練習」に入る。
- ⁵ 韓国語ネイティブ教師と日本語ネイティブ教師による週2回の授業で、1冊の教科書を用い連携して授業を行う。
- ⁶ ドラマ的手法による活動は、基本的に教科書の本文を活用するため、この教科書を使用すると早い段階からドラマ的手法の活用ができる。例えば、「안녕하세요?」の下に「안녕하세요」のようにカタカナで記している。そのため、まだ未習の文字があっても本文を読んで暗記することが可能である。
- ⁷ ただし、第2段階や第3段階の導入時期は、絶対的なものではない。履修生の人数やレベル、性向などを考慮し柔軟に対応するようにしている。
- ⁸ この履修者が履修できる韓国語科目は、他に「韓国語ⅠB(文法基礎)」「(前期)・「韓国語ⅡB(文法初級)」「(後期)と「韓国語コミュニケーションⅠ」(前期)・「韓国語コミュニケーションⅡ」(後期)がある。各週2回で選択科目である。
- ⁹ Zoomを利用したオンライン授業の際は、発表前の指導はブレイクアウトルームを利用して行った。また発表前の未習語彙や表現の紹介は、学習者に前もってPPTを作成させて発表前に共有するようにした。発表が終了した後の清書課題の提出や添削はWeb Classを利用して行った。4回目の全体フィードバックは授業中に行っている。
- ¹⁰ 学習者の中に独学等による既習学習者がいる場合は、第1段階であっても本文を修正して発表することも良しとした。ただ、授業でまだ扱っていない語彙や表現を用いる場合は、発表前に紹介してから発表するように指示した。
- ¹¹ 2021年度の「韓国語ⅡA」で使用した『ちょこチャレ』は、各単元の終わりに「できるかな?チェックリスト」があり、各課の最終ゴールを設けている。スキット作成の課題指示の際に参考にすることが多かった。
- ¹² この時、大事なことは、学習者が20分でスキットの作成を終えるように注意を払うことである。学習者には、正しいハンゲルでセリフを書くのに時間がかからないように、スキットの大まかな内容をメモするように指示している。そのメモをもとに、家で再度スキットのセリフを考え、作文することが大事な自学に結びつくためである。
- ¹³ 「韓国語ⅡA」の評価基準は、「授業への参加態度及び課題への取り組み方」に関する評価が30%、期末テストに関する評価が70%(口頭テスト:20%、筆記テスト:50%)である。普通の授業で行うドラマ的手法による活動は、期末試験の口頭テストを用いて総括する。口頭テストは、期末試験の1週間前に場面と使用文法を提示し、2名1ペアで準備するように指示する。発音、文法、内容、表現力の4つの面で評価する。テストの際にスキットの内容は清書し持参するようにする。提出したスキットは、後日フィードバックし返却する。
- ¹⁴ 2021年度の「韓国語ⅡA」は、『ちょこチャレ』の1課から12課が対象であった。中間テストは行わないため、「韓国語ⅡA」(後期)で扱った内容すべてが試験範囲になる。
- ¹⁵ アンケート調査を行った最初の時期は、「そうである」「ややそうである」「ややそうではない」「そうではない」の4段階評価をおこなっていた。しかし、分析する過程で結局は、学習者がドラマ的手法による活動について肯定的に思うか、否定的に思うかに焦点が絞られ、考察の難しさを感じた。そもそも学習者の人数が多くないため、統計的な分析も難しいことから、選択肢は簡潔にし、その代わり学習者に選択した詳しい理由を記述させることにした。その方がドラマ的手法による活動についての学習者の考えがよくわかると判断したためである。
- ¹⁶ 男子学生4名は常に近くに座るが、ペア活動やグループ活動の時に相手が変わると口数が少なくなっていたことを覚えている。
- ¹⁷ 佐藤(2019:205)では、アイスブレイクの目的として①緊張緩和、②関係構築、③(頭の)準備運動の3点を挙げている。